

# 1年国語総合 古文・漢文の「同時通訳式」唱和練習

教育エジソン

寺子屋式にみんなで声を合わせて古文・漢文を読む練習。だが、単調にならず、頭が働く仕掛けがあるので、生徒たちは飽きずに取り組み、古文・漢文が自然と頭に入り、「わかる」という実感が持てる。

## 1) 準備

古文入門の教材『ちごのそら寝』では、教科書の原文に現代語訳がついているので、それを指定した区切りで細かく改行してノートに写させる。上段が古文、下段が現代語訳 ↓下図

それ以後の古文教材では、同じ形式のものをプリントで用意。ただし、初めから現代語訳を与えるわけではなく、詳細な語注を参照して自分で現代語訳する学習を、その前に実施。

漢文の場合は、白文(返り点・送り仮名を省いた漢文)を上段に、現代語訳を下段に印刷。↓下図

## 2) 唱和練習

一行ずつ、教師が読み、生徒が後について声を合わせて読む。その練習を次のバリエーションで行う。

- ① **復唱** 教師が古文を、生徒も古文を読む
- ② **現文古訳** 教師が現代語訳、生徒が古文を読む (生徒は、現代語訳を聞き、古文に同時通訳しているイメージ)
- ③ **古文現訳** 教師が古文、生徒が現代語を読む (生徒は、古文を聞いて、現代語に同時通訳しているイメージ)

漢文の場合 古文の場合 ちごのそら寝

漢文の場合	古文の場合	ちごのそら寝
不得虎子。	不入虎穴、	僧たち、
虎の子は、手に入らない。	虎の穴に入らなければ、	よひのつれづれに、
	現代語訳	「いざ、
		言ひけるを、
		かいもちひせむ」と
		言ったのを。
		「さあ、
		ぼたもちを作ろう」と
		宵の退屈さに、
		僧たちが、
		現代語訳
		本文

## 3) ポイント

「ただ読むんじゃないよ。みんなは古文の天才なので、古文と現代文を頭の中で一瞬で変換しているイメージが大事」と話す。

くり返して、本文が頭に入ってきたら、「ノートを見ないでやってもいいよ」と誘う。

ノートを見ずに古文現訳ができれば意味が頭に入り、現文古訳ができれば、暗唱(いつのまにか)。

## 4) 漢文の場合

漢文の場合は、返り点、送り仮名のない白文を目で見ながら、同様に行う。

読みを耳で聞いただけでオウム返しをするのはダメ。漢字だけの白文を見ることがポイント

白文を見て読めるようになると、漢文の構造(主語述語、修飾被修飾、否定や再読文字など)がわかり、「未来は、未だ来ずだな」などとふだん出会う漢語を漢文として構造的に見られるようになっていく。

## 5) 結果

- ① 生徒は飽きずにくり返し声を出して唱和してくれる。

声のあまり出ない子も、小声でも心の声でも、参加すれば効果があると励まして取り組ませる。

- ② 自分(教員)は現代語訳を言う番なのに、生徒に引きずられて古文をうっかり読んでしまったりする。

そんなとき、生徒たちは必ず爆笑する。唱和練習でリラックスできていることがよくわかる。

- ③ この方法は、国語科の同僚間に紹介したら、多くの先生方が取り入れてくれ、それぞれにアレンジを加えて実践していたようである。